

なかよし学級はおもしろいよ

北区小部小の佐伯さん

なかよし学級で10年間も活動を続けている佐伯義昭さん（さえき・よしあき、国際8期・星和台在住）の“ボランティア現場”取材しようと2018年12月6日、北区の小部小学校を訪ねた。

ここのなかよし学級は9人。学年は様々で先生は3人。この日は普通学級との交流授業などで5人が不在だったので、佐伯さんは1時間目と4時間目に1人ずつ子供たちの支援をした。

1時間目の算数は4年生のA君と。すいすい進んだが、4時間目は5年生のB子ちゃんと人口密度を求める算数の計算。「うーん、難しいけどできるよね」。佐伯さんの問いかけに、B子ちゃんも一生懸命に考え、なんとか終了。3時間目は6年生のC君に付き添って理科の交流授業へ。火山灰を顕微鏡で観察する内容で、C君も「交流授業はおもしろいから好き」と顕微鏡を覗いてはノートを取っていた。

近隣のなかよし学級に比べ、小部小は多い方だ。担任の先生を手伝うボランティアも12人いる。グループ〈わ〉からは、佐伯さん（木曜担当）と南形公子さん（月曜担当・福祉13期・惣山町在住）の2人。共に10年の経験者だ。残りの半数近くは親和女子大の学生さん。週1くらいの出番なので人手不足は深刻のようだ。

1時間目が終わったところでホームルームがあり、先生がギターを弾いて「クリスマスイブ」の歌をうたった。小部小は校舎が丘陵地にあり、点在しているためグラウンドが狭いのが悩みのタネだという。なかよし学級は教室が3つもあって広い。ガス調理器や冷蔵庫も備わっており年4、5回は保護者も交え親子クッキングを楽しむ。

佐伯さんは現在81歳。1人暮らしなので家事が面倒だが、3食とも自分で料理する。晩酌とバドミントンが健康法だという。「特別支援をやるようになったきっかけは？」。シルバーカレッジを卒業後、グループ



▲写真① 4年生の男児と算数の授業をする佐伯さん
②和気あいあいの雰囲気です授業が進むなかよし学級

〈わ〉に入り、「元気なうちに少しでも社会に恩返しをしたいと思うようになったからだとか」。

「子供たちの相手は面白いですか」。「そう、毎日楽しいですよ」。「何より嬉しいのは卒業する子供たちから、“お世話になりました”と手紙を貰うこと。やってよかったとつくづく思います」。体調が許す限り今後もなかよし学級に関わりたいと、やる気充分だ。

佐伯さんは「穏やかで優しいので子供たちからも慕われていますよ」と担任の先生の信頼も厚い。

（取材 南形徹・写真 道満俊徳）